

第2回自然環境保全基礎調査（緑の国勢調査）
特定植物群落調査報告書

日本の重要な植物群落の分布

全 国 版

環境庁 編

第2回自然環境保全基礎調査（緑の国勢調査）
特定植物群落調査報告書

日本の重要な植物群落の分布

全 国 版

環境庁 編

表紙写真

撮影場所 尾瀬湿原

写真提供 環境庁西表国立公園管理事務所

中村直人

ま え が き

我が国の自然環境を破壊から守り適正に保全して行くためには、科学的な方法により全国的に調査された自然環境についてのデータを整備することが不可欠であります。昭和48年度に行われた第1回自然環境保全基礎調査、通称「緑の国勢調査」は、その意味で極めて画期的なものであり、集積されたデータは、貴重な資料として自然保護行政の推進に効果的に活用されております。

第2回調査は、昭和53、54年度の2か年にわたり実施され、得られた結果は、昭和54、55年度にデータの点検・整理や全国的な集計作業が行われました。この報告書は、第2回調査のうち、我が国における植物群落のうちで学術上重要なもの、保護を必要とするものなどの生育地及び生育状況を全国的に把握するために、3,834件の植物群落の状況について調査した結果をとりまとめたものです。

従来、我が国では、文化庁天然記念物緊急調査等の既存類似調査はあったものの、この調査により、学術上重要な植物群落や保護を必要とする植物群落の全国分布図が作成できたことは、分布情報の空白を埋めるうえで大きな前進であろうと確信いたします。

この調査は環境庁自然保護局の責任で行ったものですが、調査を実施するに当たって、調査の内容・方法の検討や調査要綱の作成に御参画いただいた検討委員各位、現地観察調査や資料収集に当たられた各都道府県の調査担当者各位等多くの方々の御協力に負うところが極めて大きいものです。また、本報告書は、調査・集計の委託業務の取扱いをお願いした株式会社ブレック研究所の御努力により完成をみたものであります。これらの方々に対し心から謝意を表するとともに、この調査結果が各種の行政や研究の基礎資料として、あるいは、自然観察の手引きとして活用され、自然環境保全のために役立つことを願う次第です。

昭和56年12月1日

環境庁自然保護局長

正 田 泰 央

自然環境保全基礎調査の経過と概要

自然環境保全基礎調査は、環境庁が自然環境保全法第5条の規定に基づき、おおむね5年ごとに地形、地質、植生、野生動物等自然環境の保全のための施策に必要な基礎資料を整備するため行うもので、一般に「緑の国勢調査」と呼ばれているものである。

昭和48年度に第1回調査が実施され、その結果は20万分の1の「現存植生図」、^(注1)「植生自然度図」、^(注1)「すぐれた自然図」及び「自然環境保全調査報告書」等にとりまとめられ、昭和49、50年度の2か年にわたり公表された。

第2回調査は、まず、昭和51年度より学識経験者で構成される検討委員会において調査項目、調査方法等が検討され、策定された調査要綱にしたがい昭和53、54年度の2か年にわたり実施された。その骨子は、次頁のとおりである。

第2回調査の結果は、昭和54、55年度の2か年にわたりデータの点検整理や集計を実施し、56年度に最終的なとりまとめ結果の公表を行うこととしている。^(注2)

(注1) 第1回調査の報告書は「緑の国勢調査」-自然環境保全調査報告書-という標題で、昭和51年3月に、大蔵省印刷局から刊行されている。

(注2) 第2回調査の報告書・地図類の刊行及び閲覧・コピーサービスについては、巻末の案内を参照されたい。

特定植物群落調査の概要

特定植物群落調査は、昭和53年度に、環境庁が都道府県に委託し、植生について知見の深い学識経験者のご協力を得て実施した。

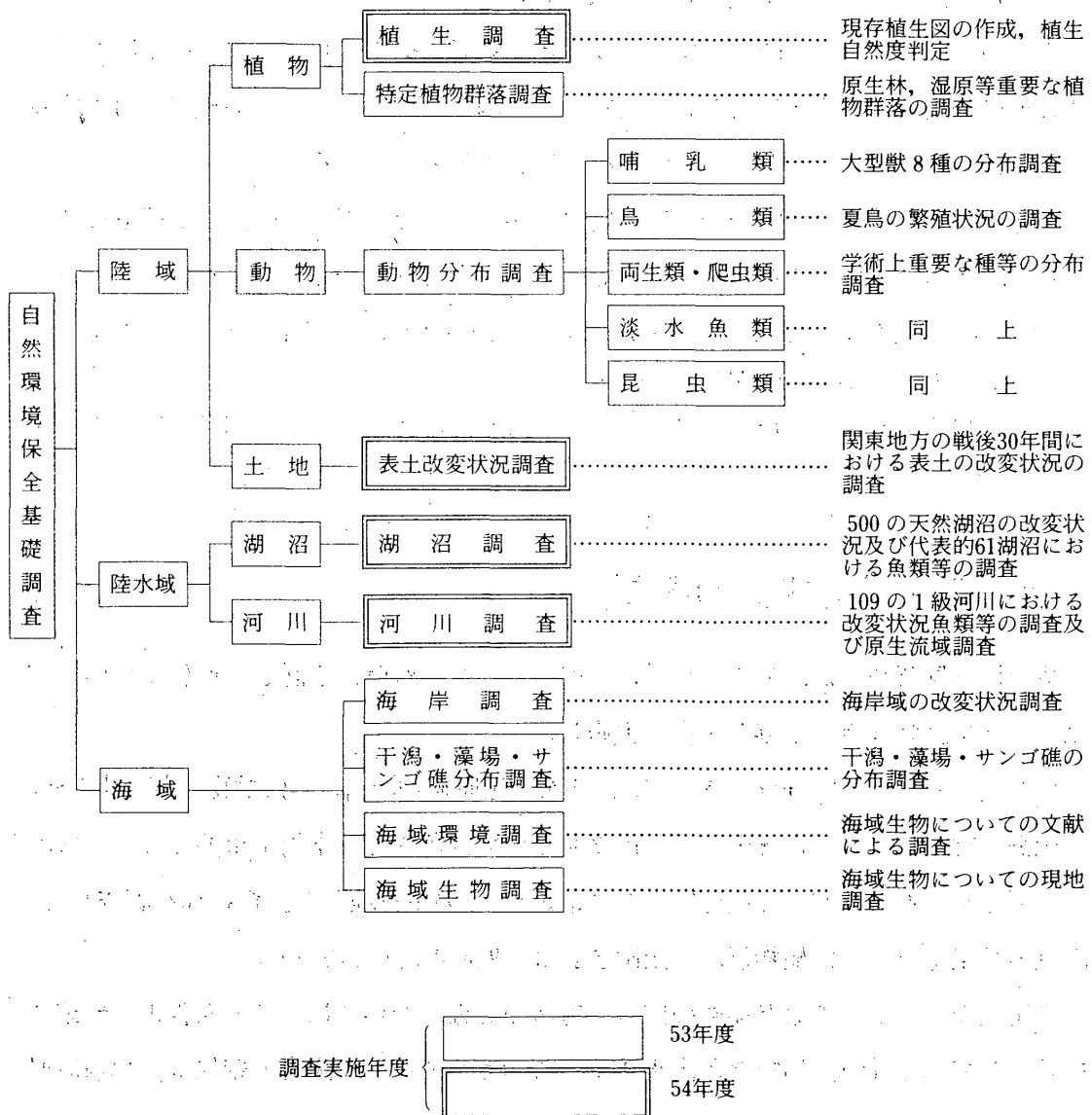
我が国における植物群落のうちで、原生林、湿原植物群落、高山植物群落、社寺林、武蔵野の雑木林のように郷土景観を代表する植物群落など、学術上重要なもの、保護を必要とするものなどを都道府県ごとに選定し、その生育地及び生育状況を調査した。調査の結果選定された植物群落の全国合計は、3,834か所であった。

選定基準、調査事項など調査の内容、方法の詳細については、この報告書の巻末に掲載されている「特定植物群落調査要綱」に示されている。調査の結果は、都道府県

ごとに「特定植物群落調査報告書」及び「特定植物群落生育地図」にとりまとめられた。昭和55年度においては、調査票のデータを電算機により処理・集計し、全国分布図を作成する作業が、環境庁の委託により株式会社プレック研究所において実施され、その成果がこの報告書にとりまとめられた。

なお、「特定植物群落生育地図」に記載された分布域は、都道府県別の「動植物分布図」(20万分の1)に動物分布等のデータとともに印刷された。

図 - 1 第2回自然環境保全基礎調査骨子



要 約

昭和 53 年度に実施された第 2 回自然環境保全基礎調査特定植物群落調査の結果の概要は、以下のとおりである。

学術上重要なもの、または、保護を必要とするものとして選定された特定植物群落は、全国で 3,833 件あり、その面積は、約 935,000 ヘクタールで、これは、国土面積の約 2.5%にあたる。

選定基準別に見ると、「原生林もしくはそれに近い自然林」として選定された群落が多く、全特定植物群落の約 4 割を占めている。次いで「郷土景観を代表する植物群落で特にその群落の特徴が典型的なもの」として選定されたものが、全体の約 1 / 4、「砂丘、断崖地、塩沼地、湖沼、湿地、高山、石灰岩地等の特殊な立地に特有な植物群落または個体群で、その群落の特徴が典型的なもの」として選定されたものが、約 2 割である。また「国内若干地域に分布するが極めて稀な植物群落または個体群」、「比較的普通に見られるものであっても、南限、北限、隔離分布等分布限界になる産地に見られる植物群落または個体群」、「乱獲その他人為の影響によって、当該都道府県内で極端に少なくなるおそれのある植物群落または個体群」および「その他学術上重要な植物群落または個体群」として選定されたものが、それぞれ全体の約 1 割となっており、最も少なかったのは「過去において人工的に植栽されたことが明らかな森林であっても、長期にわたって伐採等の手が入っていないもの」として選定されたもので、その割合は、全体の約 1 / 30 である。

選定された特定植物群落の約 2 割は国立公園に含まれており、国立公園および都道府県立自然公園を含めると、その割合は約 5 割になり、更に、自然環境保全地域を含めると、その割合は約 6 割である。

また天然記念物または名勝に指定されているものは、全特定植物群落

の約2割を占めている。

特定植物群落の面積は、1ha以上10ha未満のものが最も多く全体の約1/3を占めている。次いで1ha未満も多く、両者を合わせると、全体の約6割を占めている。10ha以上100ha未満は、約1/4、100ha以上1,000ha未満が約1割、1,000ha以上は約1/25と、大面積のものほど少なくなっている。

特定植物群落が位置する標高は50m未満に分布するものが最も多く、標高が増加するにつれて、漸次減少してゆく傾向がある。但し、面積を集計した結果では、1,000m前後に分布する面積が最も大きく、前後で次第に減少してゆく傾向がある。

立地については、特殊なものが、約半数を占め、その中で最も多いのは、水湿地、水辺植生で全体の約3割を占めている。次いで、岩礫地、風衝地植生が約1割、特殊岩地植生が4%、火山植生が1%となっている。

相観については、常緑広葉樹林が最も多く全体の約3割を占めており、その中でも特に多いのは、暖温帯常緑広葉樹林であり、全体の約1/4を占めている。次いで夏緑広葉樹林が約2割、針葉樹林が約1割、個体群が約1割となっている。

丸秘扱いとされた特定植物群落は、全国で135件(4%)である。

保存状態について記載のあったものは、約4割で、そのうちの約半数は、「良好」または「普通」であり、「やや不良」または「不良」とされたのは、全体の約2割である。

特定植物群落に対するインパクトについての記載があったのは約2割である。その中で最も多いのは「人の立入り」であり、インパクトの中では、約1/4、全体では、約5%を占めている。その他比較的多いイン

パクトとしては、「伐採等の農林業開発」、「周辺の開発」、「盗採」、「道路開発」、「植物の侵入」、「ゴミの投棄」などがあげられる。

過去の類似調査との関係については、文化庁天然記念物緊急調査の選定群落に該当しているものが約3割、IBP-CTリストの記載植物に該当しているものが6%、第1回自然環境保全調査の選定群落に該当しているものが約4割である。

特定植物群落に含まれている植物群落の中で最も多いのが、「スダジイ林」で、全体の約1割を占め、タブ林、コジイ林、ウバメガシ林などのその他の照葉樹林を加えると、全体の約3割を占めている。次いで多いのは、「ブナ林」であり、「裏日本型ブナ林」と「表日本型ブナ林」がほぼ同数で、両者を合わせると全体の約1割を占めている。その他比較的多いものとしては、「湿原」が約1割、ハイマツ林、シラビソ林などの亜寒帯針葉樹林が6%、ヒノキ林、クロベ林、アスナロ林、ウラジロモミ林などの冷温帯針葉樹林が4%、モミ林、ツガ林などの暖温帯針葉樹林が3%となっている。

SUMMARY

This survey named "National Survey on the Natural Environment (II)" was held in 1978 aiming to pick up plant communities which are scientifically highly valued and/or need special care and protection. The result of the survey was as follows.

3,833 cases in total were chosen throughout Japan as specific plant communities, which cover 935,000 hectare or 2.5 percent of the whole land of this country.

As for the criteria of the selection, about 40 percent of the specific plant communities were selected as "a virgin forest or a forest in a highly natural state, " and about 25 percent as "a community representing the landscape of a given district and having typical features of its kind." "A community or a population particular to such specific environments as a dune, a cliff, a salt marsh, a lake, a marsh, an alpine area, and an area of calcareous rocks and soil and having typical features of its kind" amounted to about 20 percent of the total, while "a community or a population existing at a few limited places in Japan," "a community or a population which, though being found commonly, exists at such critical places as southmost, northmost and remoted sites," "a community or a population which is expected to decrease to a critical number in a given prefecture as a result of a rackless cutting and other human activities," and "a community or a population of outstanding academic value" amounted to 10 percent respectively. Only 3 percent of the total were chosen as "a forest which, though evidently being planted in the past, has not been cut or

taken care of for a long time."

Roughly 60 percent of the specific plant communities were located in the domain of national parks, quasi-national parks, prefectural natural parks or nature conservation areas. Specifically, about 20 percent of the total were in national parks and 30 percent in quasi-national parks or prefectural natural parks. While approximately 20 percent of the specific plant communities were natural monuments or scenic spots designated by national or prefectural governments.

As for the size, about 60 percent of the specific plant communities were smaller than 10 hectares. Specifically, communities of 1 hectare to 10 hectares were the commonest, accounting for about one third of all specific plant communities, and communities smaller than a hectare were the second commonest, followed by communities of 10 to 100 for about 25 percent, 100 to 1,000 for about 10 percent, and more than 1,000 for about 4 percent.

As for the height, the largest number of the specific plant communities were located lower than 50 meters above sea level. The number of the communities had a tendency to decrease as the height became larger. In terms of combined size, however, the communities located around 1,000 meters above sea level accounted for the largest portion of the total, with decreasing portion at either higher or lower places.

As for the site, roughly a half of the specific communities were located in specific environments including about 30 percent of marsh and waterside vegetation, about 10 percent of rock and scree vegetation or vegetation exposed to strong winds, 4 percent of special rock vegetation, and 1

percent of volcanic site vegetation.

As for the formation, evergreen broad leaved forests accounted for about 30 percent, followed by summer green broad leaved forests for about 20 percent, and needle leaved forests and populations for 10 percent respectively. Among evergreen broad leaved forest, 25 percent of the total were warm-temperate evergreen broad leaved forests.

135 communities or 4 percent of all specific plant communities have been and will be carefully kept secret about their location.

Of the roughly 40 percent communities which carried information on their present condition, a half stated it as "good" or "fair," while the rest stated it as "comparatively bad" or "bad," which amounted to about 20 percent of the total.

Among various kinds of impacts on communities reported by around 20 percent of the specific plant communities, "trespassing" was the commonest accounting approximately 25 percent of the reported impacts or 5 percent of all communities. "Agricultural and forestry development such as cutting," "development of adjoining area," "illegal picking," "road development," "invasion by other plants," and "trash disposal" were also reported.

In connection with previous surveys, about 30 percent of the specific communities were picked up in the survey on natural monuments held by the Agency for Cultural Affairs to meet urgent demand for environment conservation, while 6 percent were included in the IBP-CT list. About 40 percent of the communities were selected as nature of outstanding academic value in the National Survey on the Natural

Environment (I) held by the Environment Agency in 1973.

Of all specific plant communities, about 30 percent were categorized as laurel leaved forest including *Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii*-forest, *Persea thunbergii*-forest, *Castanopsis cuspidata*-forest, and *Quercus phillyraeoides*-forest. Among them, *Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii*-forest accounted for about 10 percent of the total. *Fagus crenata*-forest amounted to about 10 percent with almost equal amount of *Omotenihon* (facing the Pacific) *Fagus crenata*-forest and *Uranihon* (facing the Japan Sea) *Fagus crenata*-forest. Moor amounted to nearly 10 percent, followed by 6 percent of subarctic needle leaved forest including *Pinus pumila*-forest and *Abies veitchii*-forest, 4 percent of cool-temperate needle leaved forest including *Chamaecyparis obtusa*-forest, *Thuja stadishii*-forest, *Thuyopsis dolabrata*-forest, and *Abies homolepis*-forest and 3 percent of warm temperate needle leaved forest including *Abies firma*-forest and *Tsuga sieboldii*-forest.

目 次

1 . 調査実施概要	1
(1) 調査の目的	1
(2) 調査対象	1
(3) 調査内容	1
2 . 情報処理方法	7
(1) 特定植物群落の分類	7
ア 件 名	7
イ 立 地	11
ウ 保護に関する所見等	15
エ 相 観	20
(2) 報告書及び生育地図の点検，情報の追加修正	27
ア 保護の現状欄	27
イ 群 落 名	35
ウ 生育地図上のくくり及び面積	53
エ その他	54
(3) 既存類似調査との対照	55
(4) 特定植物群落生育地の数値情報化	56
(5) 特定植物群落関連情報の整理・処理	60
(6) 特定植物群落分布メッシュ図等の作成	65
3 . 結果と考察	71
(1) 分布概要	71
(2) 選定基準別の分布	74
(3) 保護対策の状況	89
(4) 面積別の分布	98

(5)	標高別の分布	102
(6)	立地別の分布	115
(7)	相観別の分布	136
(8)	取扱い	188
(9)	保存状態	191
(10)	インパクトの状況	197
(11)	類似調査との関係	206
(12)	群落コード別の分布	213
4 .	今後の課題	331
	あとがき	333
付 表		335
1 .	第2回自然環境保全基礎調査特定植物群落調査	337
(1)	相観別件名リスト	337
(2)	立地別件名リスト	452
2 .	第2回自然環境保全基礎調査特定植物群落調査と 既存類似調査との重複関係	505
(1)	文化庁天然記念物緊急調査選定群落リスト	505
(2)	IBP - CT 選定植物リスト	534
(3)	第一回自然環境保全調査(環境庁)選定群落リスト	546
資料編		579
1 .	第2回自然環境保全基礎調査検討会	581
2 .	調査実施担当者名簿	584
3 .	第2回自然環境保全基礎調査特定植物群落調査要綱	608
4 .	第2回自然環境保全基礎調査特定植物群落調査集計整理 作業実施要綱	621
5 .	群落コード一覧表	625

1. 調査実施概要

(1) 調査の目的

昭和53年度に実施された第2回自然環境保全基礎調査特定植物群落調査の結果を集計整理し、調査対象群落の全国的な分布状況、群落の規模、選定された群落の分類、類型化された群落ごとの保存の状態、インパクトの種類・程度、保護対策の有無等を明らかにし、保護すべき群落の選定や具体的かつ有効な保護対策を検討する際の基礎的資料とする。

(2) 調査対象

昭和53年度に実施された第2回自然環境保全基礎調査のうちの特定植物群落調査結果を対象とし、地域的には、全国を対象とする。

(3) 調査内容

調査は、図-1に示すフローによって実施した。

調査の主な内容は次の通りである。

ア 特定植物群落の分類・整理

環境庁より貸与された特定植物群落調査報告書の特定植物群落調査票及び植生調査表の記載内容から次の項目に係る用語又は表現を抽出し、類型化を行った。

(ア) 件名(地名を除いたもの)

同義語(例 ブナ林、ブナの天然林、ブナの自然林……)のグループニング

(イ) 立地

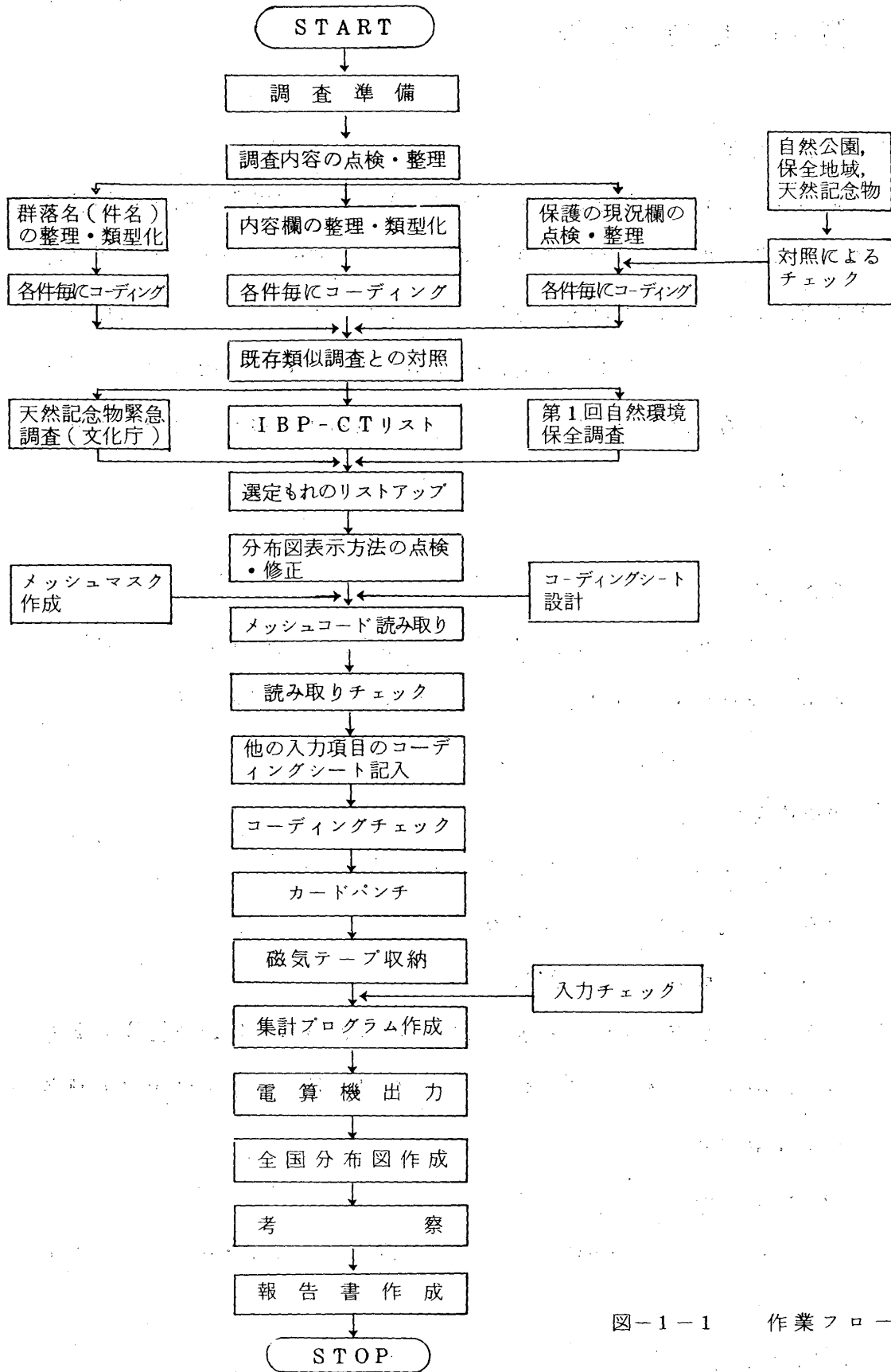


図-1-1 作業フロー

同義語のグルーピング

- (ウ) 保護に関する所見等
保存状態，インパクトの種類，必要な対策等
- (エ) 相観
(ア) を相観レベルにグルーピングした。

イ 報告書及び生育地図の点検，情報の追加修正

報告書及び生育地図について次の事項を点検し，必要に応じて情報の追加修正を行った。

- (ア) 保護の現状欄
 - 自然公園，保全地域
環境庁より貸与された自然公園，保全地域図と生育地図を対照し，記載内容に誤りがないか点検した。
 - 天然記念物等
環境庁より貸与された天然記念物リストと対照し，記載内容に誤りがないか点検した。
- (イ) 群 落 名
調査表の内容より環境庁の植生凡例一覧表に示す群落名との対応関係を明らかにし（群団レベル）該当するコード番号を付した。
- (ウ) 生育地図上のくくり及び面積
生育地図を点検し，大地域的なくくり方によるものを抽出し細区分を検討した。またくくり線の特定の場所のみが実際の生育地である場合はこれを他と区別した。
- (エ) そ の 他
その他記載漏れや，誤記について点検し，訂正した。

ウ 既存類似調査との対照

特定植物群落調査の結果を第1回自然環境保全基礎調査(すぐれた自然の調査), IBP-CT(P)リスト及び天然記念物緊急調査の結果と対照し, すぐれた自然の調査等には含まれるが, 本調査では選定されなかった群落についてはその理由を明らかにした。

エ 特定植物群落生育地の数値情報化

特定植物群落生育地図上の生育地を含む標準メッシュのコード番号を読みとった。

オ 特定植物群落関連情報の整理

以上の作業により点検, 情報の追加等を行った報告書の諸情報をコーディングシートに整理した。

コーディングシートに記入すべき情報は次の項目とした。

- (ア) 特定植物群落番号(県コード+対照番号)
- (イ) 件名
- (ウ) 相観
- (エ) 立地
- (オ) その他群落の概要
- (カ) 所在地(都道府県, 市町村)
- (キ) 標高
- (ク) 面積
- (ケ) 保存状態
- (コ) 保護の現状
- (サ) 類似調査における選定状況

- (シ) 第3次メッシュコード
- (ス) 取扱い
- (セ) 選定基準

カ 特定植物群落関連情報の処理

コーディングシートに記入された特定植物群落に関する情報を磁気テープ等に収納するとともに、入力した内容をすべてプルーフリストに出力した。

キ 磁気テープ内容の点検

磁気テープに情報が正しく収納されたかどうかについて点検した。

ク 特定植物群落分布メッシュ図等の作成

上記により作成された磁気テープをもとに群落（ブナ林，照葉樹林，高層（中・低層）湿原 etc）の分布メッシュ図（1 / 250 万程度）を作成するとともに次に示す図表を電算機により打出した。

- (ア) 都道府県別及び地方ブロック別 各種群落個所数及びメッシュ数集計
- (イ) 自然公園，保全地域別 各種群落個所数
- (ウ) 各種群落ごとの面積度数分布
- (エ) 各種群落ごとの生育状態（良好，普通，不良，絶滅）別個所数，メッシュ数
- (オ) 各種群落ごとのインパクトの種類及び件数
- (カ) 相観別 特定植物群落リスト
- (キ) 立地別 "
- (ク) 所在地別 "
- (ケ) 保護対策別 "

ケ 特定植物群落の分布状況等に関する考察

特定植物群落として選定された各種群落について分布メッシュ図，
上記図表及び各種資料をもとに，分布状況，生育状態等について考察
した。

2. 情報処理方法

(1) 特定植物群落の分類

ア 件名

(ア) 件名の様式統一と簡略化

『環境庁自然保護局，第2回自然環境保全基礎調査，特定植物群落調査要綱1978』に基づき，以下の様式に統一した。

所在地 の 対象となる植生または植物名

所在地名や対象となる植生または植物名の記載されていない件名については，調査表から名称を抽出し付記した。

例)「エビラシタの北限地」

「丁津原のエビラシダ北限地」

「大倉畑山」

「大倉畑山のカシ林」

所在地や植生が包括的に表現されている固有の名称として一般に認められている件名については，原記載に従った。

例)「尾瀬ヶ原湿原」

「瀾山原始林」

件名は電子計算機により集計分類する目的から内容を損わない限りにおいて簡略化した。基本様式に適合する記載がされていても，字数の制限(30字以内)から変更された件名もあった。

例)「後鳥羽上皇御在所跡照葉樹林」

「海士町中里のスダジイ林」

同義語は以下のように統一した

人工林・植栽林・植林

「植林」

常緑樹林・常緑広葉樹林・暖地性常緑広葉樹林・照葉樹林

「照葉樹林」

潤葉樹林・落葉樹林・落葉広葉樹林・夏緑広葉樹林

「夏緑広葉樹林」

(イ) 所在地の記載

所在地名が、特定植物群落調査表の「位置」、「所在市町村」などの欄と重複して記載されている場合は、重複部分を省略した。

例)「富士吉田市新屋山の神社落葉広葉樹林」

「新屋山の神社の夏緑広葉樹林」

件名の所在地名と、内容が一致しない場合は、内容と植生調査表に照合して適宜変更した。

例)「茨城県南部の社寺林」

「大杉神社の森林」

(ウ) 植生または植物名の記載

〔種個体群の記載〕

特定の種個体群のみが対象とされる場合は、その対象となる植物名のみを記載した。

例)「大隅南部のカワゴケソウ科個体群」

「大隅南部のカワゴロモ」

「笠置山のカキノハグサ自生地」

「笠置山のカキノハグサ」

「根本山のイワイヌワラビ群生地」

「根本山のイワイヌワラビ」

ある群落の一構成種として対象の個体群が生育している場合、

種個体群のみが対象とされるなら，群落の名称は件名から省略した。

例)「三ヶ木のカタクリ群落」

「三ヶ木のカタクリ」

「安倍峠のシロヤシオ群落」

「安倍峠のシロヤシオ」

分布限界の生育地で，件名にもそれが明記されている場合は，「北限地」などの名称は原記載に準じて記載した。

例)「ヤマグルマの分布北限地」

「小国町のヤマグルマ北限地」

対象となる個体群生地と，その周辺の地域とが併せて対象とされている場合は，原記載を採用した。

例)「出羽島大池のシラタマモ自生地」

〔植生の記載〕

単一または少数種の優占する植生は，その優占する植物の名称に「林」「群落」などの語を付記して件名に記載した。

例)「賤母山の原生林」

「賤母山のブナ林」

「宮崎鹿島樹叢の天然林」

「宮崎鹿島社のシイ・タブ林」

「高倉神社社叢」

「高倉神社のコジイ林」

「白山南竜ヶ馬場，ハクサンコザクラ雪田植物社会」

「南竜ヶ馬場のハクサンコザクラ群落」

件名に記載されている植生名が，植生調査表の群落名と重複す

る場合は，上記の原則に従って簡略化した。

例)「棚沢のオオモミジガサ - ブナ群集」

「棚沢のブナ林」

「赤城山のフジアザミ - ヤマホタルブクロ群集」

「赤城山のフジアザミ群落」

特に優占する種がみられないか，または多数の優占種が，対象となる植生に含まれる場合は，以下の手順で類型化した。

i) 単一の相観を呈する植生

針葉樹林・照葉樹林・夏緑広葉樹林などの相観名を使用した。

例)「臥牛山の樹林」

「臥牛山の針葉樹林」

「飛鳥神社樹叢」

「飛鳥神社の照葉樹林」

「福田八幡宮社叢」

「福田八幡宮の照葉樹林」

「猿田神社の森」

「猿田神社の照葉樹林」

「箱根外輪山の雑木林」

「箱根外輪山の夏緑広葉樹林」

) 複数の相観を呈する植生

自然植生の場合

{ 自然林
自然植生

代償群落のみ，または自然植生と代償群落の

双方を含む場合

{ 森林
植生

例)「黒子島原始林」

「黒子島の自然林」

「札幌藻岩山天然林」

「藻岩山の自然林」

「黒姫山の原生林」

「黒姫山の自然植生」

「奥ノ院の寺叢」

「奥ノ院の森林」

「龍泉寺の社寺林」

「龍泉寺の森林」

「白髭神社の社叢林」

「白髭神社の森林」

「石立山の高山植物群落」

「石立山の植生」

「自然教育園のスダジイ林など」

「自然教育園の植生」

) 特殊立地の植生の場合は以下の名称で記載した。

{ 湿原植生，塩沼地植生，河辺植生，海浜植生，高山荒原植生，
雪田植生，火山荒原植生，火山植生，岩隙植生，石灰岩地植
生，蛇紋岩地植生，風衝地植生など。

イ 立 地

(ア) 立地コードの決定

作業手順は以下の通りである。

全調査表の内容欄および植生調査表の立地記入状況をすべて摘

出した。

抽出された立地記載を分類・集計し、同義語を統一した。

すべての調査表の立地分類が、それぞれ一つの立地コードで表現できるように考慮してコード内容を決定した。

(イ) 立地コードの内容

立地コードは、コード番号 0 ~ 21 の 22 分類項により構成される (p. 17 参照)。そのうち、二・三の分りにくい項目について、その内容を解説する。

0 ; 一般 (気候立地)。

調査表において、気候的極相群落やその代償群落の生育する山腹や平野部などの一般立地がこの項に該当する。さらに、一つの調査表に特異立地と一般立地に生育する植生が包含されている場合もこの項に含めた (一つの山塊や、地域を対象とした調査表がこれにあたる。)

1 ; 急崖地, 岩壁。

山腹の急傾斜地や、断崖地がこの項に該当する。しかし、空中湿度が高く、日照量の乏しい溪谷部の斜面はコード番号 8 ; 溪畔斜面に、潮風の影響を強く受ける海崖はコード番号 15 ; 海岸付近に含めた。

7 ; 河辺。

増水，氾濫時に冠水などの影響を受ける谷底，河川敷がこの項に該当する。こうした影響を受けない河辺や斜面は，コード番号 8；溪畔斜面に含めた。

15；海岸付近。

海岸付近の潮風の影響を常時受けている立地がこれに該当する。また，海岸の汀線付近から内陸にかけて調査表の対象域がひろがる場合もこの項に含めた。ただし海岸砂丘地帯の場合や，礫浜は，コード番号 5 砂浜，礫浜に含まれる。

17；火山噴出物堆積地。

火山活動によって噴出した堆積物のひろがる立地で，土壌化の進行していない岩砂礫地，熔岩原などがこの項に該当する。したがって，関東ロームなどの土壌化の進行した火山灰堆積地は含まれない。

(ウ) 立地コード記入の留意点

立地コードは，対象とされた植生の立地要因の中で，最も主要な要因を記入した。例えば，石灰岩の急崖地，岩礫地は，コード番号 1 や 3 を用いず，18 の「石灰岩地」を記入した。

内容欄や植生調査表に立地の記載がない場合は，対象とされた植物群落の立地に関する知見をもとに立地コードを決定した。

用いた立地分類は次の通りである。

立 地

- 0 一般（気候立地）
- 1 急崖地，岩壁
- 2 岩角地
- 3 岩礫地
- 4 崩壊地
- 5 砂浜，礫浜
- 6 河口
- 7 河辺
- 8 溪畔斜面
- 9 流水，水中
- 10 湿地，湧水地
- 11 塩湿地
- 12 池塘
- 13 雪田・雪の吹溜り
- 14 風衝地
- 15 海岸付近
- 16 硫気孔，噴気孔原
- 17 火山噴出物堆積地（熔岩原，新期火山灰堆積地など）
- 18 石灰岩地
- 19 蛇紋岩地
- 20 隆起サンゴ礁
- 21 風穴付近

ウ 保護に関する所見等

保存状態，インパクト，必要な対策等の保護に関する所見は，保護管理に関する技術的所見欄以外の，内容欄や保護の現状欄にも記入されている場合が多く，今回の作業ではこれらの各欄の全国の記入状況を一覽して類型化をはかった。なお，必要な対策については，全国でも記入されている例が非常に少ないことや，保存状態とインパクトの内容から必要な対策が導き出されることなどから類型化の作業からは除いた。

(ア) 保存状態の類型化

保存状態は，次の7段階にコーディングした。カッコ内は記入例。

0：記載なし

1：良好

よく保護されている。
極めてよく保存。
現状がよく維持されている。
比較的良好。
良好な自然状態が保たれている。
保存はよい。

2：普通

現状のままでよい。
絶滅のおそれはないと思う。
荒廃の危険はない。
あまり人為がはいっていない。
人手のはいるおそれはない。

3：やや不良

減少の傾向。
破壊されているところもある。
破壊のおそれもある。

- 4：不良
 - 漸次衰滅に近づいている。
 - 保護の対策は全くたたない。
 - 伐採中。
 - 切り売りされている。
- 5：絶滅
- 6：確認されず

(注) 絶滅とは、生育環境自体が消滅しているもので確認されずとは文献等で記載があるが現地で生育が確認されなかったもので、生育環境からは生育の可能性を否定出来ないものとした。

(イ) インパクトの類型化

インパクトは、次の15段階にコーディングした。カッコ内は記入例。

- 0：記載なし
- 1：人の立入
 - 踏圧
 - キャンプ地化
 - 観光客の立入
 - 観光行為(ササ, 下草の刈り払い)
 - 地すべり遊び
 - 子供の遊び場
 - 暴走族の練習場
- 2：盗採
- 3：農林業開発
 - 植林化
 - 水田化

	畑化	
	下刈り	
	放牧地	
	牧野造成	
4 : 道路開発	道路建設	}
	駐車場	
	排ガス	
5 : 観光開発	観光地化	}
	遊園地	
	ロープウェイ	
	スキーコース	
	海水浴場	
	釣り場	
6 : 水辺の開発	護岸工事	}
	漁港拡張	
	堰堤の築造	
	排水工事	
	工事用採砂	
	床固工	
	河川改修	
	防潮堤	
	浚渫	
	埋立て	
7 : その他の開発	人工物	}
	土地造成	

	住宅団地造成
	パラボラアンテナ
	テレビ局のサテライト局
8：周辺の開発	3～7の開発で特定植物群落の周辺で行われているもの
9：植物の侵入	ヨシ 伐採跡地植物（ダンドホロギク，アレチノギク） チシマザサ 先駆植物 挺水植物 メダケ ヤダケ ニセアカシア 雑木 イタドリ カエデドコロ，ツルウメモドキ ハチク林 ハス 常緑針葉樹
10：虫害，菌害	マツクイムシ クジュウフユシャクの幼虫 カイガラムシ 菌害 スス病（カメノコロウカイガラムシ） 松枯れ しま枯れ

- | | | |
|------------|---|---|
| 11：動物の侵入 | 牛馬
イノシシ
畜牛の食害，排出物による富栄養化
シカ
タイワンリス
野猿 | } |
| 12：汚染物質の侵入 | 生活排水
家畜ふん尿
工事水
土砂，砂利の流入
廃油ボール
化学肥料 | } |
| 13：ゴミの投棄 | 発泡スチロール
洗剤の容器
塵埃の投棄
魚介類の投棄 | } |
| 14：自然災害 | 地熱
常風
風害
季節風
塩風
台風
雪害
軽石層が厚く崩壊する
軽石による埋立て | } |

山崩れ
表土の安定が悪い
崩壊地（小崩壊地）
山火事
乾燥化（湿地）

エ 相 観

（ア） 相観コードの決定

作業手順は以下の通りである。

全調査表の内容欄，植生調査表を通覧し，それぞれの相観を抽出した。

抽出された相観記載を，植物の生育形に従って類型化した。

広域に分布する相観には，気候帯区分の概念を導入して，細分化した。

相観的にモザイク状の分布を示す特殊立地の植生には，個別に相観コードを設けた。

複数の相観を含む一定の地域を対象とする物件については，「植生一般」，気候帯名＋「植生」などの分類項を設けて，全調査表がそれぞれ1つの相観コードで表現できるように配慮した。

（イ） 相観コードの内容と分類の留意点

相観コードをコード番号1～57の57項に分類した。

気候帯区分

相観に付記された気候帯区分は，対象となる現存植生が，現在，どの気候帯に生育しているかを示している。したがって，岩稜などの立地で冷温帯に分布の中心をもつ植生が，暖温帯に貫入して

いるような場合は、暖温帯植生として分類した。

植 林

対象とされた森林が、調査表の内容から明らかに人工的に植栽されたと判定できる場合は、他の自然生の森林と識別できるように、「植林」としてコードを類別した。

各相観コードに該当する植生例

〔複数の相観を呈し、複数の気候帯に生育する。〕

1：植生一般

例)「虫井神社の森林」(鳥取 12)

〔複数の相観を呈し、同一気候帯に生育する。〕

2：亜寒帯植生

例)「金峰山の自然林」(長野 9)

3：冷温帯植生

例)「矢形石山の風衝地植生」(青森 51)

4：暖温帯植生

例)「黒川の明神山の森林」(広島 42)

5：亜熱帯植生

例)「黄尾礁の自然植生」(沖縄 88)

〔同一相観を呈し、同一気候帯に生育する。〕

6：亜寒帯常緑針葉高木林

例) シラビソ - オオシラビソ林, コメツガ林。

7：冷温帯常緑針葉高木林

例) ウラジロモミ林, ツガ林, ヒメコマツ林。

8：暖温帯常緑針葉高木林

例) モミ - ツガ林, アカマツ林, クロマツ林。

- 9：亜熱帯常緑針葉高木林。
例) リュウキュウマツ林。
- 10：常緑針葉高木植林
例) スギ, ヒノキ, マツ類などの人工林。
- 11：夏緑針葉高木林
例) 亜寒帯のカラマツ林。
- 12：夏緑針葉高木植林
例) カラマツ人工林。
- 13：暖温帯常緑広葉高木林
例) シイ, タブ, カシ類の森林。
- 14：亜熱帯常緑広葉高木林
例) 屋久島低地や沖縄県などのシイ・カシ林。
- 15：常緑広葉高木植林
例) イチイガシ, クスノキなどの人工林。
- 16：亜寒帯夏緑広葉高木林
例) ダケカンバ林。
- 17：冷温帯夏緑広葉高木林
例) ブナ, イヌブナ, カエデ類などの森林。
- 18：暖温帯夏緑広葉高木林
例) コナラ, シデ類, ケヤキなどの森林。
- 19：亜熱帯夏緑広葉高木林
例) 「鵜戸のギョボク林」(宮崎 30)
- 20：夏緑広葉高木植林
例) ケヤキ人工林。
- 21：亜寒帯常緑針葉低木林

例) ハイマツ低木林, ミヤマネズ低木林。

22: 冷温帯常緑針葉低木林

例) 「屋久島のミヤマビャクシン低木林」(鹿児島 48)

23: 暖温帯常緑針葉低木林

例) ハイネズ低木林, ハイビャクシン低木林。

24: 亜熱帯常緑針葉低木林

例) 「阿嘉島北海岸のオキナワハイネズ群落」(沖縄 40)

25: 冷温帯常緑広葉低木林

例) シャクナゲ類, アセビなどの低木林。

26: 暖温帯常緑広葉低木林

例) トベラ, ハマビワ, ハマヒサカキなどの低木林。

27: 亜熱帯常緑広葉低木林

例) オオハマボウ, アダン, アカテツなどの低木林。

28: 亜寒帯夏緑広葉低木林

例) ミヤマハンノキ, ミネヤナギなどの低木林。

29: 冷温帯夏緑広葉低木林

例) ミヤマナラ低木林, ノリウツギ - ニシキウツギ低木林。

30: 暖温帯夏緑広葉低木林

例) イブキシモツケ低木林。

31: 冷温帯ササ原

例) ミヤコザサ, チマキザサなどのササ原。

32: 暖温帯ササ原

例) ネザサ類のササ原。

(注) 低木林: 植生高 4 m 前後までの木本群落

- 33：亜熱帯ササ原
例) リュウキュウチクのササ原。
- 34：亜寒帯広葉草原
例) シナノキンバイ - ミヤマキンポウゲ群目の草原。
- 35：冷温帯広葉草原
例) オオイタドリ - ヤマヨモギ群集などの草原。
- 36：暖温帯広葉草原
例) 「門屋のシャク群落」(静岡 85)
- 37：冷温帯単子葉草本草原
例) ススキ, カリヤスモドキなどの草原。
- 38：暖温帯単子葉草本草原
例) ススキ, チガヤなどの草原。
- 39：亜熱帯単子葉草本草原
例) コウライシバ群落。
〔特有の相観を呈し, 同一気候帯に生育する。〕
- 40：草本シダ群落
例) ミミモチシダやテツホシダの群落。
- 41：岩礫地草本植生
例) イワタバコ群落など。
- 42：タケ形林
例) キンメイモウソウ林, マダケ林
- 43：ヤシ形林
例) ヤエヤマヤシ林, ビロウ林
- 44：マングローブ林
例) オヒルギ - メヒルギ林, サガリバナ林

- 45：ツル植物群落
例)「小原野のシダ植物群」(三重 84)
- 46：蘚苔類植物群落
例)「るり沼のウカミカマゴケ群落」(福島 37)
- 47：浮葉・沈水植物群落
例) オニバス群落，水草群落など。
- 48：浮水植物群落
例)「富士山西麓のヒンジモ群落」(静岡 63)
- 49：流水中，岩上植生
例) カワゴケソウ科植物群落。
〔不均一な複数相観を呈し同一気候帯の特殊立地に生育する。〕
- 50：高山荒原植生
例) コメバツガザクラ - ミネズオウ群集など。
- 51：雪田植生
例) タカネヤハズハハコ - アオノツガザクラ群集など。
- 52：火山荒原植生
例)「桜島の熔岩地植生」(鹿児島 35)
- 53：湿地植生
例) ミズゴケ湿原と低木類。
- 54：河辺植生
例) ツルヨシ群集とヤナギ類低木。
- 55：海浜植生
例) ハマボウフウ群綱とハマゴウ群綱。
〔追加〕
- 56：亜寒帯ササ原

例) イシツチザサ, チシマザサなどのササ原。

57: 亜寒帯単子葉草原

例) ノガリヤス属草本草原。

相 観

- | | |
|----------------|----------------|
| 1. 植生一般 | 21. 亜寒帯常緑針葉低木林 |
| 2. 亜寒帯植生 | 22. 冷温帯 " |
| 3. 冷温帯 " | 23. 暖温帯 " |
| 4. 暖温帯 " | 24. 亜熱帯 " |
| 5. 亜熱帯 " | 25. 冷温帯常緑広葉低木林 |
| 6. 亜寒帯常緑針葉高木林 | 26. 暖温帯 " |
| 7. 冷温帯 " | 27. 亜熱帯 " |
| 8. 暖温帯 " | 28. 亜寒帯夏緑広葉低木林 |
| 9. 亜熱帯 " | 29. 冷温帯 " |
| 10. 常緑針葉高木植林 | 30. 暖温帯 " |
| 11. 夏緑針葉高木林 | 31. 冷温帯ササ原 |
| 12. " 植林 | 32. 暖温帯 " |
| 13. 暖温帯常緑広葉高木林 | 33. 亜熱帯 " |
| 14. 亜熱帯 " | 34. 亜寒帯広葉草原 |
| 15. 常緑広葉高木植林 | 35. 冷温帯 " |
| 16. 亜寒帯夏緑広葉高木林 | 36. 暖温帯 " |
| 17. 冷温帯 " | 37. 冷温帯単子葉草本草原 |
| 18. 暖温帯 " | 38. 暖温帯 " |
| 19. 亜熱帯 " | 39. 亜熱帯 " |
| 20. 夏緑広葉高木植林 | 40. 草本シダ群落 |

- | | |
|---------------|---------------|
| 41．岩上，多礫地草本植生 | 50．高山荒原植生 |
| 42．タケ形林 | 51．雪田植生 |
| 43．ヤシ形林 | 52．火山荒原植生 |
| 44．マングローブ林 | 53．湿地植生 |
| 45．ツル植物群落 | 54．河辺植生 |
| 46．蘚苔類植物群落 | 55．海浜植生 |
| 47．浮葉・沈水植物群落 | 56．亜寒帯ササ原 |
| 48．浮水植物群落 | 57．亜寒帯単子葉草本草原 |
| 49．流水岩上植物群落 | |

(2) 報告書及び生育地図の点検，情報の追加修正

ア 保護の現状欄

(ア) 自然公園・保全地域

自然公園区域および自然環境保全地域について生育地図との対照を行い，記載内容の点検・修正を行った。

作業の手順は次のとおりである。

5万分の1の自然公園区域図および自然環境保全地域図を該当する生育地図とをトレース台で重ね合せ，特定植物群落が重なるかどうかのチェックを行う。

重なる場合には，保護の現状欄と対照し，記入内容のチェックをし，修正する。

重なり具合が一部か全域かについても区別する。

国立公園，国定公園，原生自然環境保全地域および自然環境保全地域については，名称コード（表 - 1 - 1）を付す。

以上の結果を，記録用紙（表 - 1 - 2）に整理する。

表 - 1 - 1 名称コード一覧
 国立公園

コード	国立公園名	コード	国立公園名
0101	利尻礼文サロベツ	0115	南 アルプス
0102	知 床	0116	白 山
0103	阿 寒	0117	伊 勢 志 摩
0104	大 雪 山	0118	吉 野 熊 野
0105	支 笏 洞 爺	0119	山 陰 海 岸
0106	十 和 田 八 幡 平	0120	大 山 隠 岐
0107	陸 中 海 岸	0121	瀬 戸 内 海
0108	磐 梯 朝 日	0122	足 摺 字 和 海
0109	日 光	0123	阿 蘇
0110	上 信 越 高 原	0124	雲 仙 天 草
0111	秩 父 多 摩	0125	西 海
0112	小 笠 原	0126	霧 島 屋 久
0113	富 士 箱 根 伊 豆	0127	西 表
0114	中 部 山 岳		

国定公園

コード	国定公園名	コード	国定公園名
0201	網走	0227	室生赤目青山
0202	ニセコ積丹小樽海岸	0228	琵琶湖
0203	大沼	0229	明治の森箕面
0204	下北半島	0230	大和青垣
0205	津軽	0231	金剛生駒
0206	男鹿	0232	高野竜神
0207	栗駒	0233	氷ノ山後山那岐山
0208	鳥海	0234	比婆道後帝釈
0209	蔵王	0235	西中国山地
0210	佐渡弥彦	0236	北長門海岸
0211	越後三山只見	0237	秋吉台
0212	水郷筑波	0238	剣山
0213	南房総	0239	室戸阿南海岸
0214	明治の森高尾	0240	石鎚
0215	丹沢大山	0241	北九州
0216	能登半島	0242	玄海
0217	越前加賀海岸	0243	壱岐対馬
0218	妙義荒船佐久高原	0244	耶馬日田英彦山
0219	八ヶ岳中信高原	0245	日豊海岸
0220	天竜奥三河	0246	祖母傾
0221	揖斐関ヶ原養老	0247	日南海岸
0222	飛騨木曾川	0248	奄美群島
0223	三河湾	0249	沖縄海岸
0224	愛知高原	0250	沖縄戦跡
0225	若狭湾	0251	南三陸金華山
0226	鈴鹿		

原生自然環境保全地域

コード	地 域 名
301	南硫黄島
302	屋久島
303	大井川源流部
304	十勝川源流部
305	遠音別岳

自然環境保全地域

コード	地 域 名
401	早池峰
402	稲尾岳
403	太平山
404	利根川源流部
405	白髪岳

表 - 1 - 2

保護の現状・類似調査 記録用紙

昭和 年 月 日作成

県名	県コード	対照番号

作業機関	㈱ブレック研究所
作業者	
点検者	

				種別コード (**：名称コード)			全域1	
							一部2	
保護の現状	自然公園	国立公園	特別保護地区	1	*	*	1	不明3
			特別地域	1	*	*	2	
			普通地域	1	*	*	3	
			上記の重複	1	*	*	5	
		国定公園	特別保護地区	2	*	*	1	
			特別地域	2	*	*	2	
			普通地域	2	*	*	3	
			上記の重複	2	*	*	5	
		都道府県立自然公園	特別地域	5	0	0	2	
			普通地域	5	0	0	3	
			上記の重複	5	0	0	5	
		保全地域	原生自然環境保全地域	特別地区	3	*	*	
	特別地区			4	*	*	2	
	普通地区			4	*	*	3	
	都道府県立自然環境保全地域		特別地区	4	*	*	5	
			特別地区	6	0	0	2	
			普通地区	6	0	0	3	
			上記の重複	6	0	0	5	
	天然記念物	国指定特別天然記念物・特別名勝			1			
国指定天然記念物・名勝			2					
都道府県指定天然記念物			3					
市町村指定天然記念物			4					
上記の重複			5					
その他の保護区		名称	1					
類似調査	文化庁天然記念物緊急調査			1				
	IBP-CTリスト			1				
	第1回自然環境保全調査			1				

(イ) 天然記念物

天然記念物リストと報告書との対照を行い、記載内容の点検・修正を行った。

対象とした天然記念物は、植物を対象とした、国指定、都道府県指定および市町村指定の記念物であり、次のコーディングを行った。

- 1：国指定特別天然記念物・特別名勝
- 2：国指定天然記念物・名勝
- 3：都道府県指定天然記念物
- 4：市町村指定天然記念物
- 5：上記の重複

作業の結果は、記録用紙（表 - 1 - 2）に整理した。

(ウ) その他の保護対策

保護の現状欄に記入されている保護対策で、自然公園、保全地域、天然記念物以外のものについては、その他の保護対策として一括してコーディングを行った。

但し、記入のあったものでも、特定植物群落の保護対策としての有効性が期待出来ないものについては対象から除外した。

その他の保護対策としてコーディングしたものの例

- ・ 学術参考林
- ・ 国有林学術参考保護林
- ・ 保存樹林
- ・ 県指定特別保護樹林
- ・ 市指定保存樹林
- ・ 風致保護林
- ・ 県指定景観保存地区

- ・ 県景観保全地区
- ・ 歴史的風土保存地区
- ・ 歴史的風土特別保存地区
- ・ 自然記念物
- ・ 県指定郷土記念物
- ・ 県指定郷土自然保護地区
- ・ 県指定自然記念物
- ・ 環境緑地保全地域
- ・ 緑地保全地区
- ・ 近郊緑地保全地域
- ・ 県，自衛隊の協定による自然環境保全区域指定
- ・ 国設特別鳥獣保護区
- ・ 保安林
- ・ 防雪林
- ・ 部落の防雪林
- ・ 防潮林
- ・ 魚つき林
- ・ 営林局指定の風景林
- ・ 試験林（県林試）
- ・ 風致林（営林署管理）
- ・ 特別母樹林
- ・ 人工造林見本園
- ・ 制限林地として禁伐
- ・ 伐栽見合せ林
- ・ 市，町条例による保護区

- ・市保護地
- ・町で保護
- ・県環境保全地域候補地
- ・市グリーンプラン要保全植生
- ・市要保全植生
- ・県環境指標の森
- ・県環境指標林
- ・市環境指標林
- ・県自然休養林
- ・自然休養林
- ・自然観察教育林
- ・自然観察教育林（営林局）
- ・小学校の愛護林
- ・原生公園
- ・県立森林公園
- ・森林公園
- ・県自然園
- ・市自然観察園
- ・県民の森
- ・市民の森
- ・市立青少年自然の森
- ・都市公園
- ・市公園として管理
- ・観光樹林
- ・社叢林

- ・社寺林
- ・境内林
- ・神域
- ・信仰地
- ・部落の拝所
- ・部落の御願所
- ・御嶽林
- ・御陵林
- ・寺で保存管理
保護対策から除外したものの例
- ・国有林
- ・分収造林契約中
- ・部落の共有林
- ・鳥獣保護区
- ・海岸保全地区
- ・宅地造成工事規制区域
- ・県立自然休養村
- ・町要請の休養地
- ・大規模年金保養地
- ・緑地

イ 群 落 名

(ア) 群落コードの決定

群落コードの分類は、「環境庁自然保護局，植生図凡例一覧表
(増補改定案)，昭和54年4月」に従った。

群落コードは、各調査表に対象とされているすべての群落について、凡例表の 100 番台、10 番台を記入した。

特定植物群落のコード決定には、植物社会学的群落分類学の手法に従って、種組成を最も重視した。

植生調査表の群落名欄は、省略されているか、または優占種を重視した群落名が記載されている場合が多いために、記載された群落名はコード決定の参考とするに留めた。

群落コード決定の作業手順は以下の通り行なった。

- i) 特定群落が位置する緯度、標高、立地を参考に群落の種組成から、凡例表の 100 番台のコードを決定する。
 -) 群落の種組成から、植物社会学的知見に基づき標微種および識別種を抽出し、凡例表に記載されている群落のなかで同質または近似の群落を探して、10 番台のコードを決定する。
 -) 特定植物群落調査表の内容欄を検討し、対象とされている群落の植生調査表がすべて添付されているか再確認する。
 -) 植生調査表が省略されている場合は、地域植生誌などの既発表資料から、内容欄の記載に従って群落コードを決定する。

(イ) 追加された群落コード

環境庁による植生図凡例一覧表は、縮尺 5 万分の 1 の植生図用に作成された凡例のために、通常この縮尺では面積的に表現不可能な群落は記載されていない。今回、全国から提出された特定群落の中には 0.05ha 未満の生育面積の例や、地形図上では線状にしか表現できない岩壁植生などが多く含まれている。したがって全群落の分類のために、以下にのべる 5 つの群落が追加された。

群落番号 634：ムクノキ - エノキ群集

例)「永尾神社のムクノキ林」(熊本 25)

「球磨村権現山のユズ」(熊本 30)

「穴権現社のユズを含む自然林」(大分 31)

「古川地域の河畔植生」(広島 49) ほか。

ムクノキ - エノキ群集は、西南暖地の暖温帯の沖積低地を中心に分布する森林群落である。熊本 25 と広島 49 の林分は種組成的にムクノキ - エノキ群集に該当する。熊本 30 と大分 31 は、石灰岩地に生育する林分で、アラカシ - ナンテン群集との共通種も生育するが、全体的に異質である。このためムクノキ - エノキ群集のコードに含めた。

群落番号 635：自然低木群落

例)「久場島の岳の風衝地植生」(沖縄 43)

「野原岳東斜面の常緑低木林」(沖縄 53)

「諏訪瀬島のリュウキュウチク林」(鹿児島 78)

「湯湾岳の山頂植生」(鹿児島 89)

「古処山のオオヒメツゲ林」(福岡 50)

「仁田川のチョウセンヤマツツジ」(長崎 75)

「矢野の岩海の岩上植生」(広島 21) ほか。

暖温帯の自然低木林として、山頂部風衝地、河岸の岩礫地、石灰岩地等の断崖地および中国地方の岩海の岩上など特殊立地の低木群落をこれに含めた。

群落番号 819：岩上、多礫地草本植生

例)「手稲星置の滝の自然林」(北海道 81)

「天狗岳の山地植生」(北海道 82)

「島守のヤシャゼンマイ」(青森 14)

- 「槇木沢のイワタバコ」(岩手 6)
- 「盤司岩の岩壁植生」(宮城 59)
- 「露熊山峡の岩崖植生」(秋田 42)
- 「御神楽岳のヒメサユリ」(新潟 92)
- 「万沢のサツキ・シラン」(山梨 40)
- 「猿倉山の乾生植生」(富山 94)
- 「目附谷の自然植生」(石川 76)
- 「丈競山のエチゼンダイモンジソウ群落」(福井 20)
- 「岩舟山の暖地植物」(栃木 63)
- 「妙義山のミヨウギシダ群落」(群馬 60)
- 「袋田の滝のフクロダガヤ」(茨城 30)
- 「道元平のウラジロ群落ほか」(埼玉 59)
- 「小笠山のスジヒトツバ」(静岡 116)
- 「川合のムカデラン」(愛知 16)
- 「東杉原の河岸岩上植生」(岐阜 112)
- 「羽黒山の岩壁植生」(三重 48)
- 「保津峡の河岸植生」(京都 54)
- 「静閑瀨の断崖地植生」(和歌山 10)
- 「浦郷のオオエゾデンダ群落」(島根 78)
- 「諏訪神社のシラカシ林・コケ群落」(広島 19)
- 「吉部大岩郷の植生」(山口 51)
- 「腰折山の安山岩地植生」(愛媛 33)
- 「伊尾木洞のシダ群落」(高知 20)
- 「犬ヶ岳の自然林」(福岡 6)
- 「黒髪山の岩角地植生」(佐賀 53)

「多良のセンダイソウ群落」(長崎 10)

「小半のホウライクジャク」(大分 11)

「尾鈴山系の溪側岩上植生」(宮崎 16) ほか。

冷温帯と暖温帯の岩壁，岩隙，溪側岩上などの特殊立地に生育する草本植生をこの項に含めた。地質的には，流紋岩，安山岩，集塊岩，礫岩などの岩上に多くみられ，石灰岩地，蛇紋岩地の草本植生は群落番号 820 に含めた。相観的には，疎生する草本植物と，若干の低木類から構成され，蘚苔類も生育している。

群落番号 820：石灰岩地，蛇紋岩地草本植生

例)「白鳥山の蛇紋岩地植生」(北海道 22)

「太平山の石灰岩地植生」(北海道 95)

「安家石灰岩地帯の植生」(岩手 9)

「蓮来山の蛇紋岩地植生」(岩手 39)

「至仏山塊の蛇紋岩地植生」(群馬 27)

「猫山の蛇紋岩地植生」(広島 13)

「油石の蛇紋岩地植生」(高知 27)

「洞岳の石灰岩峰植生」(宮崎 14) ほか。

日本各地の超塩基性岩地帯に生育する草本を主体とする植物群落をこの項に含めた。なお，木本群落として石灰岩地特有の植生は例が少なく，イワシデ群落(他の地質の岩礫地にも生育)，アラカシ - ナンテン群集，自然低木群落などの群落番号に，若干の群落が含まれている。

群落番号 821：流水中岩上植生

例)「冷川のカワノリを含む溪谷植生」(三重 38)

「岩瀬川のカワゴロモ」(宮崎 47)

鹿児島県のカワゴケソウ科植物

対照番号 1, 28, 60, 62, 63。

「川内川のチスジノリ」(鹿児島 33)

西南暖地の河川流水中の岩上に生育するカワゴケソウ科植物とカワノリ, チスジノリの群落をこの項に含めた。

なお, 群落コードの一覧表は, 資料編 - 5 に収めた。

(ウ) 群落番号適用の際の留意点と具体例

群落分類に際しては, 各群集の原記載やその群集の命名者の発表した論文類を適宜参考とした。それによって, 群落構成種の全体的な類似性を最も重視して同定を行い, その群集(群落)の含まれる群落番号を適用した。特定群落のなかで, 凡例表に記載されている群落と, 種組成的に同質であるか, または生態的に同位であると判断され, しかも優占種の異なる例として以下のものがある。

(群落番号 209; キャラボク群落)

亜寒帯下部の風衝地や過湿地に生育する常緑針葉低木群落をこれに含めた。

例)「戸来岳のイチイ低木林」 青森 31

「弥蛇ヶ原のハッコウダゴヨウ林」 富山 63

など。

(群落番号 210; シナノキンバイ - ミヤマキンポウゲ群団)

亜寒帯下部の広葉広茎草原として, 生態的に同位と考えられる草本群落をこれに含めた。

例)「赤石山の高山性植生」 愛媛 8

ウバタケニンジン優占群落

「石鎚山の高山性植生」

イシツチボウフウ優占群落

など。

(群落番号 401 ; チシマザサ - ブナ群団)

チシマザサ - ブナ群団の標徴種群を含み、他の群落番号に該当しない冷温帯多雪地の自然林を、この項に含めた。

- 例)「犀川源流域のタケカンバ林」 石川 45
「山神社のコナラ - ミズナラ林」 福島 33
「和良のサワラ林」 岐阜 59

など。

(群落番号 402 ; スズタケ - ブナ群団)

スズタケ - ブナ群団の標徴種群を含み、他の群落番号に該当しない冷温帯寡雪地の自然林を、この項に含めた。

- 例)「大芦のモミ林」 福島 2
「仁科神明宮の森林」長野 41 モミ林
「中双里の森林」 埼玉 53 モミ林
「深谷のモミ林」 岐阜 113
「湯川川上流の自然林」 和歌山 34 モミ林
「韓国岳のハリモミ林」 鹿児島 16

など。

(群落番号 406 ; ヒノキ群落)

暖温帯上部から冷温帯にかけて岩角地に生育するヤマグルマ林には、ヒカゲツツジやシャクナゲ類などの多数のツツジ科植物が生育している。このような種組成的な特徴は、ヒノキ群落に最も近縁であるため、ヤマグルマ林はこの項に含めた。

- 例)「大和谷の懸崖植生」 三重 78

「普賢岳のヤマグルマ林」 長崎 1

など。

(群落番号 407；クロベ - ヒメコマツ群落)

「山中のハリモミ林」 山梨 15 は、種組成的に所属群落を判定することは困難で、強いて適用すれば冷温帯のケヤキ群落の一種とも考えられる。しかし今回の集計作業においては、冷温帯の熔岩流上に生育する常緑針葉樹林であるという群落の特殊性を重視して、この項に含めた。

なお、アカミノイヌツゲ - クロベ群集に所属するツガ林として、次の特定群落をこの項に含めた。

例)「黒薙川のツガ林」 富山 33

「猿飛のツガ林」 富山 45

など。

(群落番号 410；ミヤマクマワラビ - シオジ群集)

「赤沢岳石灰岩地のコメツガ林」 埼玉 55 は、優占樹種により判断すれば群落番号 205 のコメツガ群落に含める事も可能であろう。しかし凡例表に記載されたコメツガ群落とは、冷温帯上部の岩角地や急傾斜地および亜寒帯下部の乾性立地などを中心に分布するコメツガ林と解釈するのが妥当と考えられる。しかし、埼玉 55 の林分には、アサノハカエデ、サワグルミ、キバナウツギ、ヤグルマソウ、ミヤマクマワラビ、ツルネコノメソウなどの種群が高被度で生育している。これらの種群は表日本寡雪地の冷温帯の渓谷林であるミヤマクマワラビ - シオジ群集に高常在度で出現する植物である。したがって林冠優占種はコメツガではあるが、群落番号 410 に含めた。

(群落番号 414 ; ハンノキ - ヤチダモ群集)

ハンノキ - ヤチダモ群集は本州中部以北と北海道の冷温帯の湿地に分布する夏緑広葉樹林である。「上更別のヤチカンバ林」北海道 56 は、種組成的には所属群落は明らかではないが、冷温帯の過湿地の夏緑林である点を考慮してこの項に含めた。

(群落番号 419 ; イヌシデ - アカシデ自然林)

「霧島山のミズナラ林」 鹿児島 14 は、林内にサルトリイバラ、クロヅルなどのツル植物や、シラヤマギク、ススキなどのススキクラスの種群が生育するなど、ミズナラ二次林に種組成的に近似している。しかし、冷温帯の火山地帯にみられる自然性の高い夏緑広葉樹林である点を考慮してこの項に含めた。

(群落番号 425 ; ケヤキ群落)

暖温帯上部から冷温帯下部の溪畔斜面などに生育する夏緑広葉樹林のなかで、以下の基準に適合する群落をこの項に含めた。

アオキ、オオバジャノヒゲなどのヤブツバキクラスの常緑植物が、出現しないか、または極めて僅かの個体数で生育する。

アブラチャン、ウリノキ、ミツバウツギ、ヤマブキなどの夏緑広葉低木類やブナクラスの種群によって群落が構成されている。

高木層には、ケヤキ、オニグルミ、イタヤカエデ類、アサダ、サワシバなどが優占する。

これらの基準に適合し、ケヤキ以外の優占種の生育する夏緑広葉樹林として、以下の特定群落をこの項に含めた。

例) 「蟹寺白山社のアサダ林」 富山 99

「西加賀沢のアサダ林」 富山 100

「森越八幡神社のイチイ林」 岐阜 12

イロハモミジ林

「藤原岳のキンポウゲ科植物」 三重 40

オニグルミ林

など。

(群落番号 601；モミ - シキミ群集)

暖温帯上部の常緑針葉樹林のなかで，以下の基準に適合する特定群落をこの項に含めた。

高木層にモミ，ツガなどの常緑針葉樹類が優占する。

亜高木層以下には，アカガシ，ウラジロガシ，シキミ，サカキ，イヌガシ，ヤブツバキなどのヤブツバキクラスの種（特にサカキ - ウラジロガシ群団構成種）が生育する。

シデ類，コナラ，ヤブムラサキ，ムラサキシキブ，カマツカ，ガマズミなどのコナラ - ミズナラオーダーの種（特にイヌシデ - コナラ群団構成種）が各層にみられる。

これらの基準に適合し，モミ以外の樹種の優占する常緑針葉樹林として，次の特定群落をこの項に含めた。

例)「永源寺のアスナロ林」 滋賀 33

「雪彦山のツガ林」 兵庫 54

「原田のクロベ林」 島根 67

「雁巻山の森林」 高知 6 ツガ - スギ林

「千本山のスギ林」 高知 7

など。

(群落番号 602；ツガ - ハイノキ群集)

暖温帯上部の常緑針葉樹林のなかで，以下の基準に適合する特

定群落をこの項に含めた。

高木層にツガなどの常緑針葉樹類が優占する。

全階層に夏緑植物が生育（時に優占）する。シデ類，ミズナラ，ブナなどや，スズタケ - ブナ群団の種（ヒメシャラ，コハウチワカエデなど）またはチシマザサ - ブナ群団の種（タムシバ，エゾユズリハなど）が混生する。

ハイノキ，シキミ，ヤブツバキ，アカガシなどのヤブツバキクラスの種が生育する。

アセビ，シャクナゲ類などを含むツツジ科植物が低木層を中心に生育する。

これらの基準に適合し，ツガ以外の樹種の優占する常緑針葉樹林として，次の特定群落をこの項に含めた。

例)「高代山のトガサワラ林」 三重 85

「東ノ川の自然林」 和歌山 38 トガサワラ林

「坂泰川の自然林」 和歌山 39 コジイ - ヒノキ林

「花倉山の自然林」 鳥取 59 ヒノキ林

「千本山のトガサワラ林」 高知 8

「安田川山のトガサワラ林」 高知 10

「東霧島山の自然林」 宮崎 56 ハリモミ林，ヒノキ林
など。

(群落番号 603；ヒメアオキ - ウラジロガシ群集)

ヒメアオキ，ユキバタツバキ，ハイイヌガヤ，チャボガヤ，チシマザサ，ホソバカンスゲ，トキワイカリソウなどの裏日本型分布種の生育するカシ林をこの項に含めた。ウラジロガシ以外の常緑広葉樹の優占する森林としては，次の特定群落をこの項に含めた。

- 例)「能生白山神社のアカガシ林」 新潟 60
「寺池公園のアカガシ林」 富山 93
「珠洲神社奥宮のアカガシ林」 石川 5
「甲斐崎神社のアカガシ林」 石川 41
「赤瀬白山神社のツクバネガシ林」 石川 92

など。

(群落番号 604；サカキ - ウラジロガシ群集)

暖温帯上部の内陸型自然林のなかで、以下の基準に適合する特定群落をこの項に含めた。

群落はヤブツバキクラスに属する常緑植物によって構成され、若干の夏緑植物を含む。

群落構成種には次に挙げる種群が含まれている。

アカガシ、ホソバタブ、バリバリノキ、ユズリハ、イヌガシ、シキミ、サンゴジュ、ハイノキ、ヒイラギ、アセビ、カヤ、イヌガヤ、ミヤマシキミ、ツルシキミ、アカシデ、コガクウツギ、キッコウハグマ

林冠は、ウラジロガシ、イスノキ、アカガシなどの照葉樹によって構成される例が多い。

上記の基準に適合し、林冠構成種がと異なる特定群落としては、以下のような例をこの項に含めた。

例 - 1) 内陸部のスダジイ林、タブ林

- 「下野八幡神社のタブ林」 山梨 41
「大竜寺のスダジイ林」 兵庫 19
「常隆寺のスダジイ林」 兵庫 32
「幻住寺のスダジイ林」 岡山 21

「吉川八幡神社のスダジイ林」 岡山 35
「志度石神社のスダジイ林」 山口 15
「鈴ヶ峰のヤッコソウ」 徳島 43 スダジイ林
「神峰のスダジイ林」 高知 19
「轟峡のスダジイ林」 長崎 15
「富川溪谷のスダジイ林」 長崎 16
「干綿溪谷のスダジイ林」 長崎 22
「山ノ寺のスダジイ林」 佐賀 61
「角山のスダジイ林」 熊本 35
「栗野岳のタブ林」 鹿児島 20
「野間岳のタブ林」 鹿児島 73

など。

例 - 2) 針葉樹林

「妹山の森林」 奈良 17 ヒノキ林
「白見山国有林のスギ - ツガ林」 和歌山 7
「白見山民有林の針葉樹林」 和歌山 8
ツガ林, ツガ - ヒノキ林, スギ林
「化気神社の森林」 岡山 28 ウラジロガシ - モミ林
「白ヶ谷のカヤ林」 徳島 30
「奥ノ院の森林」 愛媛 1 ツクバネガシ - モミ林

など。

(群落番号 605 ; ケヤキ群落)

特定群落として報告されたアオギリ林とモクゲンジ林は、必ずしも種組成的に共通性が認められない。該当する群集名では、イロハモミジ - ケヤキ群集, アブラチャン - ケヤキ群集, ホソバ

カナワラビ - スダジイ群集などがあげられる。今回の集計作業では、主に暖温帯のケヤキ群落の一型と考えられる事と、種の特殊性を考慮して、この項に含めた。

- 例)「滝戸山のアオギリ林」 山梨 30
「早川橋北詰のモクゲンジ林」 山梨 76
「白浜神社のアオギリ林」 静岡 53
「鹿島のアオギリ林」 愛媛 59

など。

只し、他の群落内の一構成種としてアオギリ等が混在している場合は、その所属群落の群落番号順に含めた。

- 例)「那佐半島のアオギリ」 徳島 42
群落番号 613

など。

(群落番号 606 ; アラカシ群落)

暖温帯内陸部のサカキ - ウラジロガシ群団に所属するアラカシ群落をこの項の主体とした。種組成的には群落番号 610 ; サカキ - コジイ群集や群落番号 611 ; シイモチ - シリブカガシ群集とは、暖温帯の乾性立地の照葉樹林として共通種が多い。それにはシャシャンボ、ソヨゴ、カナメモチ、リンボク、アセビ、タカノツメなどがあげられる。これらの種群を含む照葉樹林のなかで、コジイを欠きアラカシが高被度で出現し、かつナナメノキ、タラヨウなどの種群が生育する林分をこの項に含めた。なお、石灰岩地に生育するアラカシ - ナンテン群集と、沖縄県のアマミアラカシ群落が、凡例表に従ってこの項に含まれている。

高木層にアラカシ以外の樹種が優占し、上記の種群が林内に生

育することからこの項に含めた特定群落としては以下のような例がある。

- 例)「仏教寺のスダジイ林」 岡山 25
- 「志呂神社のスダジイ林」 岡山 26
- 「字甘溪の森林」 岡山 29 モミ林
- 「臥竜山の森林」 岡山 30 モミ林
- 「臥牛山の針葉樹林」 岡山 49 モミ林
- 「伊福部神社のスダジイ林」 兵庫 25
- 「矢倉神社のツクバネガシ林」 兵庫 56
- 「花尾八幡宮のツクバネガシ林」 山口 39

など。

(群落番号 608 ; イチイガシ群落)

この項には、イチイガシ群集とルリミノキ - イチイガシ群集*の2群集を含めた。西南暖地の社叢では植栽起源と推定されるイチイガシがクスノキなどと共に林冠を構成する例があり、自然林との識別が難しい。この項に含まれるイチイガシ群落は、以下の種群が林内に生育する照葉樹林とした。

ミミズバイ, センリョウ, ヤマビワ, イズセンリョウ, ホソバカナワラビ, ミヤマノコギリシダ, ルリミノキ, サツマルリミノキ, カンザブロウノキなど。

これらの種群が多く個体数で林内に生育するが、高木層にイチイガシが優占しない照葉樹林として次の特定群落をこの項に含めた。

注) * ; Lasiantho - Qnercetum gilvae K.Fujiwara 1980

例)「鬼ヶ城白滝付近のコジイ林」 三重 31
「野根八幡宮のスダジイ林」 高知 2
「河内神社のコジイ林」 高知 5
「八所宮のスダジイ林」 福岡 44
「大野溪谷のコジイ林」 熊本 18
「水俣市大川のコジイ林」 熊本 31
「高岡の照葉樹林」 宮崎 19 ハナカガシ - コジイ林
など。

(群落番号 610; サカキ - コジイ群集)

シイ - クロキ群集, シイ - カナメモチ群集に該当する林分のなかで, ミミズバイ - スダジイ群集と種組成的に重複しない特定群落をこの項に含めた。

(群落番号 611; シイモチ - シリブカガシ群集)

シリブカガシの優占する特定群落をこの項に含めた。

(群落番号 613; スダジイ群落)

凡例表に記載されている群集に該当しスダジイ以外の樹種が高木層に優占する特定群落として, 以下のような例をこの項に含めた。

例 - 1) ミミズバイ - スダジイ群集

「越戸大山のカゴノキ林」 愛知 50
「石鏡神社のコジイ林」 三重 6
「浜神社のコジイ林」 三重 28
「王島・花ヶ島のタブ林」 高知 33

例 - 2) ホソバカナワラビ - スタジイ群集

「松原王子神社のイヌマキ林」 和歌山 79

「七神社のイスノキ林」 山口 63

例 - 3) リュウキュウアオキ - スタジイ群集

「種子島のコジイ南限林」 鹿児島 7

(群落番号 614 ; タブ群落)

凡例表に記載されているイノデ - タブ群集とムサシアブミ - タブ群集のいずれかに該当し、タブノキ以外の樹種が高木層に優占する特定群落としては、以下のような例をこの項に含めた。

例) 「藤懸神社のケヤキ林」 石川 60

「大山のバクチノキ林」 千葉 70

「遊木神社の照葉樹林」 三重 87 イスノキ - スタジイ林

「神内神社の植生」 三重 91 クスノキ - イスノキ林

「対馬・神山のナタオレノキ林」 長崎 90

ナタオレノキ林, ケヤキ - イスノキ林

なお, 和歌山県や鹿児島県などで報告されたアコウ個体群は, タブ群落の断片と解釈して, この項に含めた。

(群落番号 621 ; ハンノキ群落)

暖温帯の湿地に生育するハナノキ, シデコブシ, サクラバハンノキなどの夏緑広葉樹林をこの項に含めた。

例 - 1) ハナノキ・シデコブシ林

「恵那のハナノキ林」 岐阜 44

「恵那のシデコブシ林」 岐阜 47

など。

例 - 2) サクラバハノキ林

「花坂のサクラバハノキ林」 石川 86

「鬼ヶ久保の湿原植生」 宮崎 12

(群落番号 622 ; 河辺ヤナギ低木群落)

暖温帯の溪畔に生育するコウヤミズキ群落をこの項に含めた。

例) 「南原峡の森林」 広島 63

「万古溪の峡谷植生」 広島 118

など。

(群落番号 626 ; マングローブ群落)

九州の海岸に生育するハマジンチョウ群落をこの項に含めた。

例) 「日ノ島のハマジンチョウ林」 長崎 51

「三井楽のハマジンチョウ林」 長崎 55

「阿久根のハマジンチョウ」 鹿児島 70

など。

(群落番号 806 ; オギ群集)

河川の主に中・下流域にみられる。増水により破壊されることの少ない河辺に生育する草本群落をこの項に含めた。

例) 「黒部川原の河辺植生」 富山 22

東京都多摩川の河辺植生

対照番号 ; 東京 26 , 28 , 31 , 32 , 33 , 34 , 35 , 36 , 37 ,
40 , 42 , 44。

「相模川の河辺植生」 神奈川 17

など。

(群落番号 808 ; ハマボウ群落)

三重県 , 宮崎県などの海浜に生育するハマナツメ群落をこの項に含めた。

例) 「南島町のハマナツメ低木林」 三重 33

「竹島のハマナツメ林」 宮崎 6

など。

(群落番号 817 ; 火山荒原植生)

暖温帯の新时期火山噴出物堆積地に生育するヤシャブシ林 , クロマツ林 , マルバサツキ低木林などの先駆木本群落をこの項に含めた。

例) 「桜島の溶岩地植生」 鹿児島 35

「桜島中腹のヤシャブシ林」 鹿児島 36

「諏訪瀬島のマルバサツキ低木林」 鹿児島 76

「諏訪瀬島のヤシャブシ南限林」 鹿児島 77

など。

ウ 生育地図上のくくり及び面積

生育地図のなかで , 山脈の自然植生などのように , 大地域的なくくり方をしているものが一部にみられる。これらは , 相観の異なるものが包含されており , 特定植物群落の内容を把握する上からは , せめて相観レベルまで細区分されていることが望ましい。しかし , くり線を細分した場合には次の問題が生じることが予想される。

大地域的なものの選定基準は , A (原生林もしくはそれに近い自然林) であり , A の性格上 , 複数の群落が混じるのはやむをえないといえるが , これを細分した場合には選定基準が不明確になる。

対照番号（件数）が増加し，再コーディングが必要となり，それに伴って，細区分毎に，件名，立地，保存状態，インパクト等を入力する必要があるが，調査者との調整が必要になると思われる。

以上のことから，今回は，調査者の考え方を尊重して，くくり線の細区分は行わないこととした。

但し，くくり線の線引きが大雑把なものは現存植生図との比較対照をして点検を行った。

また，一部にくくり線が記入していないものも見られたが，各県に問合せを行って記入・修正をした。

エ その他

その他，記載漏れや，誤記について点検し，訂正した主な訂正内容は，次のとおりである。

地図番号の誤記の訂正

所在地（市町村名）の誤記の訂正

標高の記入もれ，誤記の追加・訂正

なお，面積の記入もれについては，点検した結果，いずれのケースも，湿原等が広範囲にわたって点存する群落でくくり線が，比較的大まかなとり方をしており，群落の単位が小さいため，現存植生図でも表われてこないものもあるため，正確な面積の算定が困難であったため，面積は空欄のままとした。

(3) 既存類似調査との対照

次の3つの調査等による選定リストおよび分布図と特定植物群落調査結果を対照し、それらの重複関係を明らかにし、既存調査では選定されているが、特定植物群落調査で選定されなかったものについては、一括してリストアップし、その理由を明らかにした。

天然記念物緊急調査（文化庁）

IBP - CT リスト（JIBP）

第1回自然環境保全調査（環境庁）

作業の手順は次のとおりである。

天然記念物緊急調査については、都道府県別に1/20万の分布図と、1/5万の生育地図とを比較対照して、その重複関係を点検する。

IBP - CT リストについては、生育地図とリストの生育地との比較対照によって重複関係を点検する。

第1回自然環境保全調査については、都道府県別に1/20万の分布図と、1/5万の生育地図とを比較対照して、その重複関係を点検する。

上の点検の結果、選定されなかったものについては、今回の調査員（群落調査票に記載）に問い合わせを行い、その理由を明らかにする。

以上の作業結果を、記録用紙（表 - 1 - 2）に整理する。

なお、上記3調査と特定植物群落調査との関係を調査した結果は、巻末に附表として整理した。（附表1～3参照）

(4) 特定植物群落生育地の数値情報化

特定植物群落生育地図上の生育地を含む、標準メッシュのコード番号を読みとった。

作業の手順は、次のとおりである。

5万分の1の地形図の縦横をそれぞれ20等分したメッシュ(標準メッシュ)を透明なポリエステル・フィルム上にインキングしたメッシュマスクを作成する。

メッシュマスクは、5万分の1の地形図が属する各緯度毎に作成し、東京、大阪を含む北緯36°前後の地域については対象図幅が多くなるため、必要に応じて複数枚作成する。

作成したメッシュマスクを該当する生育地図にオーバーレイして、特定植物群落が属するメッシュコードを読み取る。

読み取り基準は次のとおりとした。「特定群落が属する三次メッシュのすべてを読みとる」

この方法は、実際よりも広く表示されることになるが、面積のデータは別に入力するので問題はない。

なお、この読み取り基準は、国土数値情報(国土地理院)における「離島」、「保全地域」、「防災指定地域」等の読み取り方法と同様である。

読み取った結果は、記録用紙(表-1-3)に整理する。

なお、標準地域メッシュの規格は、図-1-2~3に示すとおりである。

特定群落位置記録用紙

昭和 年 月 日作成

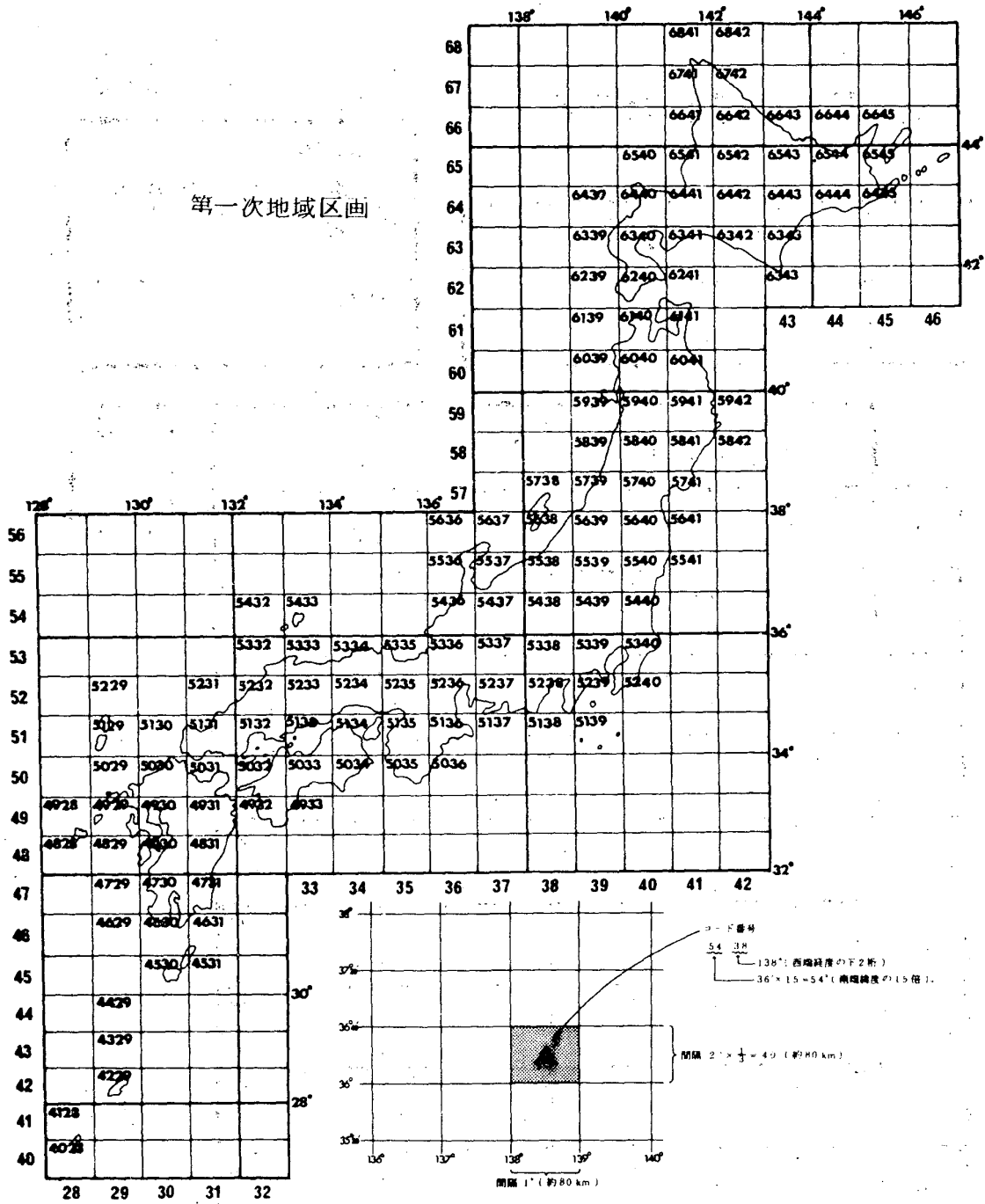
県名	県コード	対照番号

作業機関 株式会社 プレック 研究所
作業者
点検者

	第一次区画	第二次区画	第三次区画
1			8
2			16
3			24
4			32
5			40
6			48
7			56
8			64
9			72
10			80

枚目 /

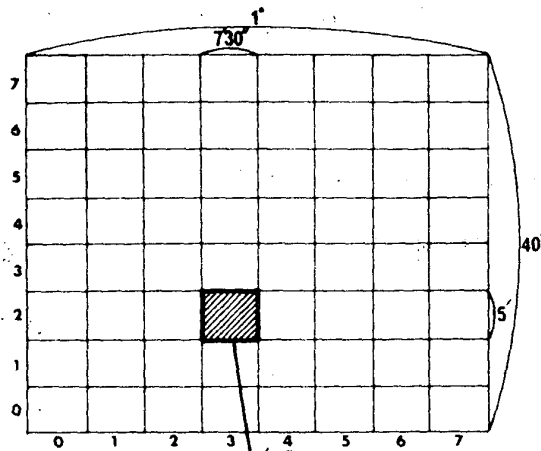
図 - 1 - 2 標準地域メッシュ - 1



第一次地域区画のコード番号の付け方

(出典) 統計審議会答申「統計に用いる地域コードの標準化について：統計審議第19号 1969」

図 - 1 - 3 標準地域メッシュ - 2



第二次地域区画

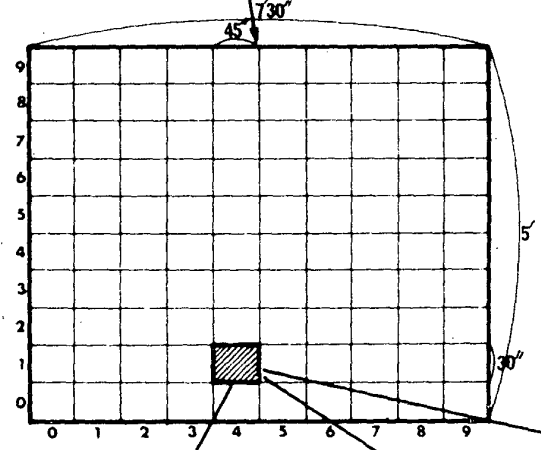
第二次地域区画は、第一次地域区画を8分割したもので、国土地理院1:25万地形図の1枚に当る。大きさは5'×7'30"で約10×10kmである。

コード番号は、例えばBは

5438-23

↑ 第二次地域区画のコード番号

↑ 第一次地域区画のコード番号



第三次地域区画

(標準メッシュ、1kmメッシュ)

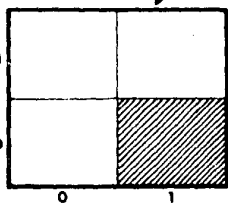
第二次地域区画を10分割したもので、大きさは30"×45"で、約1×1kmである。

コード番号は、例えばCは

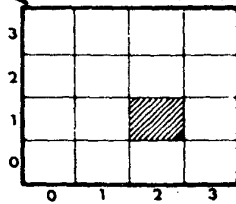
5438-23-14

↑ 一次 二次 三次

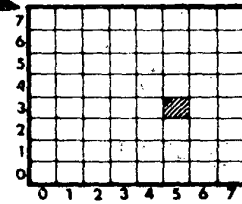
分割メッシュ



1/2分割メッシュ
(500mメッシュ)



1/4分割メッシュ
(250mメッシュ)



1/8分割メッシュ
(125mメッシュ)

5438-23-14-01-2

↑ 一次 二次 三次

↑ 1/4分割メッシュを示す記号

↑ 1/2分割メッシュのコード

5438-23-14-12-4

5438-23-14-35-8

(5) 特定植物群落関連情報の整理・処理

ア コーディングシート設計

(1)～(4)によって得た情報を磁気テープに入力するためのコーディングシート設計を行った。

コーディングの項目およびその所要スペースは次のとおりとした。

特定植物群落番号(県コード+対照番号)	5桁
件名(カタカナ)	30
取扱い	1
地図番号	3
選定基準(最高5つが重複)	5
市町村(コード+単or複)	6
標高(最低+最高)	8
面積(小数1位)	7
立地	2
相観(コード+群落or个体)	3
群落数	2
保存状態	1
環境圧(インパクト)	2
類似調査との関係(文化庁, 1BP, 第1回)	6
保護対策(自然公園, 保全地域, 天然記念物, その他)	17
群落コード	× 3
メッシュ数	4
メッシュコード	× 8

(注) : 丸秘のものを1とし, 他は0とした。

: 複数のもは, 分布域の中心の地図で代表させた。

: 複数のものは、分布域の中心の市町村で代表させ、末尾に、1
を付し、単数の場合は0を付した。

: 個体植物を対象としている場合には、末尾に1を付し、群落を
対象としているものは0を付した。

以上の内容を記入するためのコーディングシート(表 - 1 - 4)
を作成した。なお、メッシュコードについては(4)で作成した記録用
紙(表 - 1 - 3)をそのまま用いた。

特定植物群落調査コーディングシート

表-1-4

県名	ページ /															
	5	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60	65	70	75	80
1	集約コード 対照番号 作者名															
2	文(記号) IBBP 第1回 自然公園 保存地域				記念物 その他 群集コード											
3	集約コード 対照番号 作者名															
4	文(記号) IBBP 第1回 自然公園 保存地域				記念物 その他 群集コード											
5	集約コード 対照番号 作者名															
6	文(記号) IBBP 第1回 自然公園 保存地域				記念物 その他 群集コード											
7	集約コード 対照番号 作者名															
8	文(記号) IBBP 第1回 自然公園 保存地域				記念物 その他 群集コード											
9	集約コード 対照番号 作者名															
10	文(記号) IBBP 第1回 自然公園 保存地域				記念物 その他 群集コード											
11	集約コード 対照番号 作者名															
12	文(記号) IBBP 第1回 自然公園 保存地域				記念物 その他 群集コード											
13	集約コード 対照番号 作者名															
14	文(記号) IBBP 第1回 自然公園 保存地域				記念物 その他 群集コード											
15	集約コード 対照番号 作者名															
16	文(記号) IBBP 第1回 自然公園 保存地域				記念物 その他 群集コード											
17	集約コード 対照番号 作者名															
18	文(記号) IBBP 第1回 自然公園 保存地域				記念物 その他 群集コード											
19	集約コード 対照番号 作者名															
20	文(記号) IBBP 第1回 自然公園 保存地域				記念物 その他 群集コード											

作業機関 (株)プレック研究所
 作業者
 点検者

イ 入力形式

コーディングシートに記入した結果を、磁気テープに入力した。

入力は、メッシュコードに関する情報は別ファイルに分けて行った。

即ち、表 - 1 - 5 に示すように、メインファイルには、 ~ の情報を入力し、メッシュファイルには と ~ を入力した。

表 - 1 - 5 入力形式

メインファイル

カード - 1

				最小	最大
	県コード	整数	2	1 ~	47
	対照番号	"	3	1 ~	136
	件名	力ナ	30	~	30
	取扱い	整数	1	0 ~	1
	地図番号	"	3	1 ~	270
	選定基準	英字	5	A ~	H
	市町村	コード	整数	5	1100 ~ 47382
		数	"	1	0 ~
	標高	最低	"	4	0 ~ 3,800
		最高	"	4	0 ~ 3,800
	面積	小数 1 位	7	0.1 ~	80,000
	立地	整数	2	0 ~	21
	相観	コード	"	2	1 ~ 57
		個体	"	1	0 ~
	群落数	"	2	1 ~	17
	保存状態	"	1	0 ~	6
	環境圧	"	2	0 ~	14

75

カード - 2

⑭	類似調査	文化庁	整数	2	0, 11, 12, 13
		I B P	"	2	0, 11, 12, 13
		第1回	"	2	0, 11, 12, 13
⑮	保護対策	自然公園	"	13	0 ~ 6005 × 3 + 1, 2, 3
		保全地域	"	2	0 ~ 53
		天念記念物	"	2	0, 11, 12, 13
		その他	"	2	
⑯	群落コード	"	⑩ × 3	101 ~ 917	

メッシュファイル

カード-1	①	県コード	整数	2	1 ~ 47
		対象番号	"	3	1 ~ 136
	⑰	メッシュ数	"	4	1 ~ 1149
カード-2	⑱	メッシュコード	"	③ × 8	36240652 ~ 68401729

(6) 特定植物群落分布メッシュ図等の作成

入力したデータを目的に応じて集計し、その結果を図表等で出力した。
出力の内容は、次のとおりである。

ア 集計表

(ア) ブルーリスト：入力データ全体の出力

(イ) 都道府県別，地方ブロック別の件数，面積

なお地方ブロックの区分は，各省庁で種々の区分が行われているが，本調査では植物の分布特性を把握するために，気候区分を考慮して次の16ブロックに区分した。

地方ブロック	都道府県名
1. 北海道	北海道
2. 裏東北	青森，秋田，山形
3. 表東北	岩手，宮城，福島
4. 北関東	茨城，栃木，群馬，埼玉
5. 南関東	千葉，東京，神奈川
6. 北陸	新潟，富山，石川，福井
7. 甲信	山梨，長野
8. 東海	岐阜，静岡，愛知
9. 近畿	滋賀，京都，奈良
10. 紀伊	三重，和歌山
11. 阪神・山陽	大阪，兵庫，岡山，広島
12. 山陰	鳥取，島根
13. 四国	徳島，香川，愛媛，高知
14. 山口・北九州	山口，福岡，佐賀
15. 中九州	長崎，熊本，大分
16. 南九州・沖縄	宮崎，鹿児島，沖縄

(ウ) 保護対策別の件数，面積

保護対策全体

自然公園，保全地域，天然記念物，その他

国立，国定，県立，原生，保全，県立，天然

保護区分別

公園別

(エ) 面積別件数（全国，地方，県）

1 ha 未満

1 ha 以上

10ha 未満

10 "

20 "

}

}

}

100 "

200 "

}

}

}

21 1,000 "

2,000 "

}

}

}

30 10,000 "

20,000 "

}

}

37 80,000 "

(オ) 標高区分別の件数，面積（全国，地方，県）

50m 未満

50m 以上

100m 未満

100 "

200 "

}

}

}

22 2,000 "

2,200 "

23 2,200 "

2,400 "

24 2,400 "

(カ) 選定基準別，件数，面積（全国，地方，県）

(A~H)

水湿地，水辺植生	コード：5，6，11，15 7，8，9，10，12，13
特殊岩地植生	コード：18，19，20
火山植生	コード：16，17
(工) 相観別の分布	
針葉樹林	コード：6，21 7，22 8，23 9，24 11
常緑広葉樹林	コード：13，26 14，27 25 43 44
夏緑広葉樹林	コード：16，28 17，29 18，30 19
高山植生	コード：50 51
水辺，湿地，池沼植生	コード：47，48，49 53 54 55
個体群	コード：末尾1

